

本山彦一刊 『皇陵巡拝地図』 について

徳田 誠志

1 はじめに

先般、堺市在住の植田兼司氏より、『皇陵巡拝地図』と題された1葉の地図が関西大学博物館に寄贈された。小稿ではこの地図を紹介していくとともに、今から80年ほど前の皇陵巡拝ブームというものを明らかにしていきたい。

2 『皇陵巡拝地図』について

この地図は横51.5cm、縦106.6cmを測り、16折りに畳まれている(写真1)。そして封筒に入れられているが、そこに「大阪毎日新聞社社長本山彦一」と記してある。

この地図発行の経緯を示す記載として、封筒の左上隅に「昭和二年十一月三日 第一明治節當日」とある(写真2)。すなわちこの記述から考えられることは、この地図は第1回の明治節に配布されたものであろうと推測することができる。

「明治節」とは明治天皇の誕生日(嘉永5年(1852)の9月22日を太陽暦に直したもの)であり、明治時代における「天長節」である。

この「天長節」は天皇の代替わりによって順次日が変わっていくものであるが、大正天皇の即位とともに明治天皇誕生日が「先帝祭」となる。そして大正天皇の崩御を経て、明治天皇誕生日の扱いをめぐる議論が高まり、昭和2年3月3日に「明治節制定ノ詔書」が発せられる。その内容は「朕カ皇祖考明治天皇大業夙ニ曠



写真1 「皇陵巡拝地図」

古ノ隆運ヲ啓カセタマヘリ茲二十一月三日ヲ明治節ト定メ臣民ト共ニ永ク天皇ノ遺徳ヲ仰キ明治ノ昭代ヲ追憶スル所アラムトス」となっている。この内容から今日でも昭和天皇の誕生日である4月29日が「みどりの日」を経て、「昭和の日」という国民の祝日となっているように、明治天皇の遺徳を偲ぶことを目的としたものであることがわかる。

すなわちこの地図が配布された「昭和2年11月3日」は、詔書によって決定された「明治節」の1回目であり、各地で様々な行事が実施されたと考えられる。その具体的な式典については定かではないが、本山翁を中心とした会が開催され、その記念としてこの地図が配布されたものであろう。

地図そのものは近畿地方にある陵の分布図であり、左端には四角に囲まれた中にこの範囲外にある「大正天皇多摩陵」「神代三陵」等の位置が表示されている。スケールは12万5千分の1であり、実際この地図で各陵を巡ることは難しいかも知れないが、各地に点在するすべての陵(北朝天皇などの歴代外陵を含めて)を記載していることは興味深い。

3 「陵墓巡拝」ブームの到来

昭和2年は前年12月25日に大正天皇が崩御し昭和と改元されて、実質的に昭和がスタートした年である。むろん新年を祝うこともなく年が明けたわけだが、2月7日には新宿御苑において大喪儀が執りおこなわれ、翌日未明に「多摩陵」と名付けられたみささぎへ埋葬された。同月13日午前9時より一般国民の参拝が許可され、数万の人々が押し寄せたことが新聞記事に残されている。

この多摩陵は大正15年10月に制定された「皇室陵墓令」にもとづいてはじめて東京都内に築かれたみささぎである。それゆえ関東に住む人々にとってはみささぎは珍しいものであり、本格的な築陵が始まる5月までに相当数

の人々が参拝したようである。このことはもちろん大正天皇への追慕を物語る現象でもあるが、その一方で多数のお土産物屋が店を出したり、あるいはそれを取り締まったりする記事も散見される。少しうがった見方をすれば、都内在住の人々にとっては、初めて見るみささぎへ参拝し、絵はがきのようなちょっとしたお土産を買うという小旅行気分であったようにも感じられる。

この多摩陵の参拝を1つの契機として「陵墓巡拝」が全国的なブームへと拡がっていく。もちろん明治天皇伏見桃山陵、あるいは神武天皇畝傍山東北陵などについては「御陵前」という駅があるように、関西在住の人にとっては日常に溶け込んでいたのかも知れない。しかしながら大正天皇陵の营建から昭和10年頃までの参拝は、「陵墓巡拝」ブームといっても過言ではないような状況を生み出す。その証拠に今日、この時期に刊行された「陵墓位置図」あるいは「陵墓参拝の栞」という類の図書を数多く古書店で見つけることができる。

このように多くの人が陵墓を参拝するにつれて、「陵印」が備えられるようになる。この陵印とは各陵墓名等を刻んだ印鑑であるのだが、当初より官で誂えたものではなく、自然発生的に地元篤志家からの寄贈等によって製作され、配置されていったようである。昭和2年頃には「参拝記念章を朱印帳に拝領した」との記録も見られ、この頃には使用されていたことが窺える。現在は宮内庁によって統一した陵印が製作されているが、当初は形状や大きさ、刻字内容に統一性はなくバラエティーに富む印影が残されている。

このような陵印が製作され印影を集めることは、まさに霊場を巡って「御朱印」を集めることと相通じるものがある。御朱印集めが宗教的な行為であると同時に、庶民にとっては日常を脱する旅の色彩があるように、陵墓巡拝は皇室への尊崇を示す行為であるとともに、人々にとってある種楽しみでもあったことが窺える。

このような時代背景を含めて改めて本題の『皇陵巡拝地図』を見てみると、この地図の製作意図が見えてくる。すなわち第1回の明治節において、この頃ブームになり始めていた

陵墓巡拝に利便を図る目的で印刷され、配布されたことはまさに時節を得たものであったことがわかる。

そしてまた、この地図の欄外には「増補訂正第3版」とあり、本山翁は今回紹介している地図に先だって大正6年の元日に同様の地図を配布していることが知られている（船越幹央「明治・大正期における皇陵巡拝」『大阪市立博物館研究紀要』第33冊2001年）。

4 おわりに

今回植田氏から寄贈された1葉の地図から、昭和初めに制定された「明治節」と皇陵巡拝ブームについて見てきた。しかしこのブームは、長くは続かなかつたようである。というのも昭和10年代半ばには日中戦争が本格化し、さらに昭和16年12月の日米開戦、昭和18年10月の学徒出陣へと一気に戦時色が拡大していく。このような時代にあっては庶民のささやかな楽しみを要素を含んでいた皇陵巡拝は影を潜め、強制化、狂信化した濁流に呑み込まれていったものと考えられる。

本年は昭和の元号で数えると、85年となる。すなわちほぼ日本人の平均寿命を過ぎたこととなる。よって、この時代のことを知る人も少なくなってきたことはまちがいない。このこと自体は歴史の必然でもある。

しかしわれわれは1葉の地図を前にして、その歴史的背景を知ることによってその時代に生きた人々の息吹を感じ、その心のうちを見つめていく必要がある。

この地図は、私たちに戦前の空気を伝えてくれる資料である。



写真2 封筒

宮内庁書陵部首席研究官